第四十八回　全国七大学総合体育大会

菅野　真

８月１９日。パソコンの前でメールを作成する。宛先は東北大学保健管理センター。

ご存知の通り、僕たち東北大学学友会バドミントン部は東京大学で行われた七大戦で大変厄介なみやげを仙台に持ち帰ってきてしまった。

新型インフルエンザである。

七大戦が終わり、感傷に浸ったり、落ち着いたりする暇もなく、僕は部員全員の感染情報の確認・整理・報告に追われていた。不幸にも、僕自身も発症していた。

メールも一段落。現在の熱は３８．６度。ベッドに横になり、部屋の天井を仰ぐ。

自然と七大の回想が脳裏によぎる…。

時計の針を少し戻し、矢の様に過ぎ去ったあの激動の七大を思い返してみたいと思う…。

――――

前述の通り、今回の主管は東京大学。東大駒場キャンパスの体育館で行われた。

試合前日の天候は最悪。土砂降りの中での移動となった。例年通り、前日入りして公式練習に臨んだ。

照明、シャトルの飛びなどを確認しながら調整をしていたが、なにより気になったのが床のすべり具合。折からの豪雨と猛暑で体育館内の湿度が異常に高まり、かなり危険な状態だった。

次の日以降に環境上の大きな不安を残しながら、オーダー会議を終え、次の日に備えた。いよいよだ。

――――

東北大　対　北大

因縁の相手、北大がなんと今年は初戦。個人的にはもっと後半で試合がしたかった気もする。ここ最近では北大から勝ち星を挙げられていない。しかし、初戦のここで、しかも北大という相手に勝利できればこの後の試合にものすごく乗った状態で臨めるだろうということで、なんとしても取ろうと気合を入れて臨んだ。

Ｄ１　菅野・武田０（12-21 18-21）２村岡・山下

最初の最初だから、俺らで勝って、勢いつけようと優と臨んだ試合。しかし、相手のショット力をこちらの速さで対抗することができず、主導権を握れなかった。自分たちがオフェンスサイドのときは当然有利なのだが、

レシーブ展開からいかに攻撃へ持っていくかに課題が残った。初戦なのにみんなすまなかった。

Ｄ２　大藤・横山１（21-16 18-21 20-22）２山本・黒澤

相手の四年の意地に屈したか。別段決定力のある相手ではないのだが、微妙に粘られることで小さなミスが蓄積して負けた試合だと思う。

これからは落ち着いて状況を把握する力をつけてほしい。

Ｄ３　田村康・野崎０（13-21 10-21）２川西・谷平

ようやく掴んだ二人のダブルスデビュー。

かなり緊張していたのか、硬かったように見えた。展開的には防戦一方で、田村の試合作りや野崎のショットといったお互いの持ち味を活かせていなかったようだ。残念。

この時点で０－３。最悪のスタートとなってしまった。シングルのみんなに申し訳ないことをした。

Ｓ１　小南０（19-21 13-21）２山下

一年生はこの小南と大橋がレギュラー入りしてくれた。また二人だけでなく、他の一年生もみんなポテンシャル、モチベーションの高い者ばかりで、非常に部の雰囲気もよくなっていたと思う。初心を忘れず、長期的な視点で目標を立て今後もがんばってほしい。

さて、その小南のデビュー戦。やはりこちらも緊張の色がかなり見えた。つなぐプレースタイルが、山下の高さによって打ち崩された展開。ほろ苦いデビュー戦となってしまった。

Ｓ２　大藤２（23-21 21-23 21-12）１山本

去年の七大と同カード。オーダー発表のときに大藤が苦笑いしていたな。

相手の山本は二度も同じ相手には負けたくはなかった、と後で話したときに言っていた。かなり気合が入っていた模様。

１、２セットともにかなり拮抗した展開。お互い無駄なミスをせず、相手を追い込んでいくタイプなので我慢比べのような試合だった。

迎えるファイナル。普段はあまり声を出さない大藤も、ひとつ、またひとつとポイントを重ねるたびに声を出していた。山本の集中力も切れたようで終わってみれば21-12で勝利。見事ダブルスの借りを返した。

Ｓ３　武田２（16-21 21-12 21-18）１小林

大藤とのシングル二本柱、優の初戦。出だしは自分自

身のリズムをまだ掴めていなかった模様。加えて相手が特徴的なストロークをしていて、かなりやりにくそうだった。

インターバル時に「自分のプレーをしよう」と話し、二セット目へと送り出した。

セカンドは本来のプレーが発揮された。持ち味の上からのショットが冴え、相手の動き、攻撃を封じた。

ファイナルも同様。セカンドよりも多少点数は取られたものの、リズムはまったく変わらず、リードを保って21‐18で勝利。次に繋いでくれた。

S４　水谷２（21-16 21-19）０松原

七大に向け、人一倍ストイックに、そして着実に力を付けてきた水谷。その練習の取り組み方からも七大に対する想いがひしひしと伝わってきた。その水谷の初戦。自然と応援にも熱が入る。

緊張はあったろうが、そんなことは微塵も感じさせないキレのあるフットワークが練習通り発揮された。スピードは最後まで保たれ、相手を封じた。デビュー戦見事勝利。おめでとう。

S５　横山０（18-21 11-21）２村岡

単複共にレギュラーに食い込んできてくれた横山の今大会シングル初戦。

現在のカウントは３‐４。これに勝てばなんとか決めの田村に繋がるが、やはり分が悪かった。終始村岡のショット力に翻弄される形になってしまった。横山には初戦から少し重い役割を負担させてしまった。申し訳ない。

結果、３‐５で宿敵北大に敗北。勢いをつけるためになんとしても勝ちたかったが、苦いスタートとなってしまった。

MC

福井１（20-22 21-15 20-22）２川之上
明宏・今城０（20‐22 19-21）２奥山・常盤
上山・原田０（10-21 16-21）２阿部・前田

――――

東北大　２－５　阪大

二戦目は今期七大トップクラスの実力を誇る大藤の高校時代の同期、毛利を要する阪大。しかし阪大はこの日ダブルヘッダー、しかも午前の試合を偵察すると前年のレギュラーだった水井、東を欠いていたことが判明したため、勝つならばそこを狙い目に行こうとメンバー内で確認した。

D１　大藤・横山０（20-22 16-21）２毛利・木越

奇しくも同期の大藤と毛利はダブルスで対戦することとなった。毛利の本来のパートナーは水井だったため、即席ダブルスで臨んでいた。そのため勝機はあったと思ったのだが…。やはり毛利のポテンシャルは相当高かった。また大藤自身にも若干のやりにくさがあったようだ。

Ｄ２　菅野・武田２（22-20 13-21 21-14）１宗田・妙中

宗田とは昨年の七大のダブルスで対戦し、ファイナル激戦の末、惜敗している相手。ここでリベンジしたかった。かなりゆっくりまわしてくる相手なので、それに翻弄されないように速さで打ち抜いていこうと戦い方を確認。

一セット目。やはりゆったり回してくる展開で少しやりにくかったというのが本音。お互いが点数を重ね続け、最後は攻撃力で何とか上回り、デュースの末、先取。

二セット目。一セット目のときに引っかかったやりにくさを引きずり、コンビネーションがギクシャクしてしまう。うまく試合を作れない自分自身に苛立ち、優にも迷惑をかけてしまった。無駄なミスが重なり、落としてしまう。

この雰囲気ではまずい。インターバルの時間を目いっぱい使った。確認したのは、相手に振り回されないこと、レシーブと前衛で俺が作り、優が後ろでガンガン打つこと、そして一点一点を大事にし、声を出すこと。よく話したことで、気持ちはリセットできた。

ファイナル。やはり気持ちの持ち方はすごく大事だということを実感した。特に攻撃の部分で前衛後衛うまくかみ合い、思うような展開でゲームができた。いらないミスもなく、14で勝利。

Ｄ３　田村康・野崎０（17-21 18-21）２正平・撰

両校３ダブ対決。正平は前々からレギュラーで実力を知っていたが、撰は正直よくわからなかった。「まずは一勝したいな」と会話を交わし、送り出した。

やはりまだ緊張からかプレーが硬いようだった。やりたいようなプレーができないもどかしさも伝わってきた。やはり七大では本来の力をいかに１００パーセント出せるかが勝負を分ける。

しかし、野崎の持ち味である重く鋭いスマッシュや田村のレシーブ、前衛が随所で光っていた。まだ二戦目。次に期待だ。

ダブルスは１－２で折り返し。

Ｓ１　大藤２（21-14 21-17）０田中

大藤を毛利には当てたくないとトップシンに持ってきたものの、正直もっと格上の相手を潰してほしかった…。しかしきっちり取ってくれたのはさすがだった。

これで２－２。

Ｓ２　小南０（12-21 20-22）２正平
　一セット目。こちらもやはりプレッシャー、緊張からの硬さでミスが目立っていた。相手ペースで終える。
　二セット目は少し違った。小南の堅実に繋いでいく良さが出てきた。「落ち着いて」「一本ずつ」と熱の入った応援が続いたが、あと一歩のところで取られてしまう。惜しかった。

Ｓ３　横山０（19-21 9-21）２宗田
　ダブルス同様ゆったり回してくる宗田のリズムに完全に飲まれていた。一セット目は相手もミスが目立っていたが、こちら側も同量のミスを積んで、最後に走られた形。二セット目は完全に開いてペース。相手のほうが一、二枚上手だと感じざるを得ない試合だった。
　こちらも早く本来の力を出してほしいと願い、次戦に期待した。

Ｓ４　水谷０（19-21 16-21）２毛利
　オーダー発表で毛利が水谷に当たるのがわかったとき、本人は苦笑いしていた。しかしその試合が近づくにつれ、その目からは「食ってやろう」という闘志が感じられ、とても頼もしかった。
　その闘志が力となったか、試合は均衡した。ギリギリまで並ぶも最後は毛利の地力によって走られた一セット目。二セット目も喰らいついていたが、常に２、３点のセーフティリードを保たれ、敗れてしまった。
　しかし、毛利のスピードについていき、粘り続ける姿勢に周りの応援も自然と盛り上がった。七大らしい、いい試合だった。

結果、２－５で敗退。未だチームの勝ちを挙げられず。

ＭＣ
水口１（21-18 15-21 16-21）２倉橋
田村洋・浅野２（14－21 21-15 21-18）１藤田・柿谷
大橋・高村１（21-12 10-21 16-21）２藤本・乾
・大橋・高村は惜しかった。反応で返球をしているので考えるダブルスを覚えよう。ただ二人ともショットはいいものを持っていると思う。今後に期待している。

――――

東北大　対　九大
　下馬評では優勝候補と呼び声の高い前年、前々年度覇者の九大。例年四年が出ない九大だが、今年は主力福原が参戦しており、正直かなり高い壁だった。
　オーダー会議も難航した。なかなか勝利の糸口が見つ

からない。最終的には、ダブルス2本、優と大藤で和田（喜）、坂本に勝ち、残りの四人のうち、どこかで二本というのが目標となった。

D1　菅野・武田0（15-21 16-21）2和田喜・池田
D2　田村康・野崎0（13-21 13-21）2福原・坂本

この二つのダブルのうち、どちらかが取らなければならなかった。しかし、どちらのダブルスとも相手の攻撃力、速さに翻弄され、歯が立たなかった。

実力的に上の相手でも何が起こるかわからないのが七大。しかしながらその特徴を活かせることができなかった。

D3　大藤・大橋2（21-11 21-16）0西村・和田悠

横山が肩痛を発症し、また大藤も流れを変えるためにということで急遽組むことになった大橋。緊張、プレッシャーがかなりあったと思うが、きっちり取ってくれた。

実力的に多少余裕があったとしても、きっちり勝つのが難しいのが七大。しかも一年生でしっかり勝ち星を挙げられたのは今後の自身になると思う。おめでとう。

残りの四本はシングルに託すことになった。

S1　武田0（14-21 14-21）2坂本

細かく言うと、坂本には昨年善戦している大藤を当てたかった。だが、優でも行けると思ったのだが…。

攻撃力同士の戦い。しかし最後は坂本に打ち切られる形になってしまった。勢い未だ衰えずという感じで、シングルでも速い展開で攻めてこられてしまった。残念。

S2　大藤2（21-11 21-16）0山内

阪大戦に続き、また大藤のオーダーを外してしまった。すまない…。オーダーは何度考えてもやはり難しいものだ。きっちり一本取ってくれた。

S3　小南0（17-21 17-21）2和田喜

ダブルスが得意な和田にタッチ、球足の速さで上回られた。

小南の場合、タッチの早い相手に対して差し込まれないよう、自分の打点もしっかり前に持っていけるようになってほしい。

S4　田村康0（15-21 12-21）2福原

福原を相手にかなり緊張していた模様。しかし、試合はのびのびとやっていたように思える。

ただやはり福原、といった感じで、後ろからのショットの後、前に詰めてくる早さが他とはレベルが違った。必死に喰らいついていくも完敗。

結果２－５で敗退。完敗だった。

ＭＣ

山口０（10-21 13-21）２平原
砂川・斎藤２（21-10 26-24）０佐伯・森本
川西・樫内２（21-14 21-19）０正木・高田
金子・平間２（21-19 21-16）０佐伯・森本
金野・福澤２（21-19 21-16）０
児玉・小林１（21-19 17-21 16-21）２千代見・三益

九大も人数が多いため、たくさんＭＣをしたいとのことだった。

・斎藤・砂川は元気があってとても良かった。応援し甲斐があったぞ。最後は激アツだったな。
・川西・樫内はなぜか応援がたくさん集まり盛り上がっていた。勝てて良かったな。
・金子・平間は大学始めながら七大初戦で初勝利！おめでとう。
・金野・福澤は組んで間もなかったが、こちらも勝利を飾る。おめでとう。
・児玉・小林は最後まで惜しかったな。児玉の独特なドライブが随所で冴えていたのだが…惜しかった。

東北大 対 東大

次こそは…何とかまず一勝を…。そんな思いしかもうなかった。まさかの結末になるとはまだ誰も気づいていなかった。

Ｄ１ 菅野・武田０(14-21 19-21)２天野・木坂

東大のエース天野。本来のパートナーであるインハイ選手仁島を欠いているため、そこが狙い目だと思ったのだが。

展開は後手後手。攻撃をするパターンが少なかった。思うような攻撃ができず、２セットで惨敗。

あまりの不甲斐なさに地面を拳で叩き、天を仰いだことを今でも鮮明に覚えている。

Ｄ２ 田村康・野崎０(21-23 13-21)２小野塚・石原

最初はかなり均衡し、二人もいけると思っていたよう。しかし小野塚の特徴的なプレーがやりにくかったらしく、セカンドは走られ惜敗。

後一歩のところまできているところなのだが。

「すまん…」そう言う野崎と田村の顔が悲痛で、主将としてもかなり辛かった。

Ｄ３ 大藤・大橋０(15-21 14-21)２宮崎・本宮

九大戦とは違って、ミスが目立っていた。それほど攻撃力のある相手ではないのだが、タッチが遅れ、自分たちから攻撃していく場面が少なかったように思える。

しかし、０－２で回し、プレッシャーをかけてしまった俺らにも責任がある。すまなかった。

０－３でシングルへ。最悪の流れ。

Ｓ１　水谷０(8-21 14-21)２天野

東大は上位入賞を目指し、完全に上へ実力者を詰めてきた。天野がトップに来るのは読めなかった。

動きが持ち味の水谷も完全にそのフットワークを封じられた。ラリーが短く、相手に思うようなバドミントンをされてしまっていた。

Ｓ２　大藤０(17-21 17-21)２小野塚

悪い流れはついに大藤にも影響を与えてしまった。いつもの大藤とは違って、ミスが目立ち、フットワークも気持ち遅れがちな気がした。こんな状況下で試合をさせてしまったことを本当に申し訳なく思う。

東大に０－５。誰も予想し得なかった結果…。

チームの雰囲気はもう言葉に言い表せないほどのものだった…。誰もが座り込み、壁にもたれ、うつむいた。言葉は何一つ出てこなかった。

毎日応援来て下さる先輩方に対しても、合わせる顔がなかった…。そんな中でもやさしく励ましの声を掛けてくれる先輩方には感謝してもしきれなかった。それが唯一の救いだった。

ＭＣ

高荷・冨手０(10-21 12-21)２木村・松長

千葉・澁澤２(21-11 21-7)０真田・長谷川

倉石０(18-21 17-21)２島

佐野・菅井２(21-15 21-16)０松本・恒川

・高荷・冨手は少々相手が強かったか…。あと冨手君、忘れ物にはくれぐれもご注意を。

・千葉・澁澤はスムーズに勝利。実力差があっても最後まで声を出してプレーしていたね。その姿勢は本当に大事だと思う。忘れずに常に心がけてほしい。

・倉石は常に2、3点をリードされながらの展開だった。その長身は絶対アドバンテージになるから、それを活かしながらこれからも頑張って。

・佐野と菅井も一年生らしく、元気に、楽しそうにプレーし勝利。今年の一年生を見ていると初心を思い出させられます。

―――

東北大 対 名大

背水の陣。何としても勝ちがほしい。振り返るのは後にして、今やれることをやるしかない。全員欲しかったのは勝利。ただそれだけだった。

Ｄ１ 田村・野崎2(21-19 12-21 21-17)1浅田・手島

良かった。一勝できて本当に良かった。これまで負けが続き、辛そうだった二人には、どうしても勝ってほしかった。

ファイナルで、かなりハラハラさせられる試合だった。正直次の自分らの試合よりも、気になってしょうがなくて、固唾を飲んで優と応援した。

勝った二人は、ファイナルになったことについて手を合わせて謝りながらも、その顔には安堵と喜びに溢れていた。本当に良かった。おめでとう。

Ｄ２ 大藤・大橋1(21-19 16-21 18-21)2藤田・上原

途中では、ダブル３本も狙えると思ったのだが…。相手の意地に僅差で屈したか。

相手は名大の一ダブ。だが逆にそれで二人はのびのびできていたかもしれない。よく善戦したと思う。

Ｄ３ 菅野・武田2(21-16 21-13)0水野・平松

Ｄ１で勝利を挙げた田村・野崎とガッチリ握手を交わし、試合に入った。相手は昨年の七大でもまったく同じカードで勝っている相手。

田村と野崎の勢いをそのままもらい、しっかり自分たちのリズムでプレーできた。途中八木さんが応援に来て下さり、的確なアドバイスを頂いた。それがそのまま試合に活き、きっちり勝つことができた。完勝。

Ｓ１ 小南0(15-21 10-21)2藤田

相手は一番手、藤田。今大会は一年生にも関わらず、小南にはとても辛い役回りをさせてしまった。申し訳ない。

この試合も後手に回る展開。反撃の糸口を掴めないまま終わってしまった。

Ｓ２ 横山2(18-21 21-14 23-21)1浅田

肩の痛みを押し、出てくれた横山。横山も勝ててよかった。

内容的には少し難あり。ファイナルでダブルスコア並みのリードを持っていながら、デュースまでもつれた。ハラハラしたぞ。この試合を今後の教訓にしてほしい。

だが何より勝てて本当に良かった。おめでとう。

Ｓ３　武田２(21-10 19-21 21-16)１上原
　相手は藤田との二本柱を成す上原。しかし気迫と意地で優が取ってくれた。試合が進むにつれて粘ってくる相手に対して、よく集中力を切らさず勝ちきってくれたと思う。勝ちたい執念でチームのために球を追う優の姿に頼もしさと感動を覚えた。きっと後輩たちの目にも焼きついているはずだ。ぜひその姿を見習ってほしい。

Ｓ４　大藤２(21-10 21-10)０手島
　今大会の大藤の引きはことごとく外れる。しかし今までとはわけが違う。これで勝ちが決まる。無駄のない展開でさっくりと勝ってくれた。ありがとう。

５－２で名大に勝利。喉から手が出るほど欲しかった、初勝利。

　ここで初勝利を挙げるのはあまりにも遅すぎることを痛いほど良くわかっていた。
　しかし応援に来てくださった先輩方はみんな心から祝福してくれた。本当にありがとうございました。

　とにかくみんなにとって、勝てて本当によかった。みんなの顔にはようやくという気持ちからか、安堵感に溢れていた。

ＭＣ
田村康２(21-11 21-17)０平松
・決めまで回れば行うカードだったＳ６の試合。しっかり完勝してくれた。さすがです、田村。フットワークも安定していて日々のランニングの成果が現れていたよ。

明宏・今城２(16-21 21-15 21-13)１彦坂・稲垣
・相手は名大元主将とレギュラーメンバーのペア。実力者との対決となったが、ファイナルの接戦の末、見事勝利した。
　明宏は高校からの同期として、とても心強い存在だった。早いもので共に七年間バドミントンしたことになる。これからも同郷の者同士、バドをしていこう。応援も心強かった。本当にありがとう。
　今城は、メンバーに入りながら、試合に出してやることができなくて申し訳なかった。ただ早い段階からメンバーの練習に入って、実力もついたし、多くのことを学んだと思う。主将としてしっかりその経験を活かしてほしい。

福井２(21-15 21-17)０松下
　一試合目は盛り上がった上の敗戦。二試合目は見事勝利で飾ることができた。

真はこの大会中、しっかりと後輩を引っ張って応援をしてくれた。僕らのダブルスのときに「コートの中に入ってるヤツらが本気でやってるんやから、俺らも本気で応援するで。」と後輩に呼びかけてくれたときは、本当に感動した。同期の大切さをあらためて実感した。ありがとう。嬉しかったよ。

――――

東北大　対　京大

この段階で六位になるのは決定していた。しかしメンバー全員の闘志はまだ消えていなかった。ひとつでも多く勝利が欲しい。このままじゃ終われない。みんながそう思って最終戦に臨んだ。泣いても笑ってもいよいよ最後だ…。

Ｄ１　菅野・武田２（25-23 24-22）０大森・松木

相手に合わせてしまい、勝ったものの内容的にはあまりよくない試合だった。同時に、やはり七大できっちりと勝つこと、完勝することの難しさを最後の最後で痛感させられた。

Ｄ２　田村康・野崎１（21-14 14-21 14-21）２伊藤（彰）・嶋田

一セット目を取ったときは、間違いなく勢いづいていると思った。しかし次第に攻撃が封じられてしまい、フアイナルで敗退。惜しいところで負けたために、非常に悔しそうだった。

二人がレギュラーに入ってくれて、本気で戦い抜いてくれて本当に良かったと思っている。練習でも自覚を持って取り組み、しっかり周りを牽引してくれた。試合が近づくにつれ、野崎の集中力はどんどん高まっていった。その練習態度や声の出し方から、野崎の想い、気迫を感じた。田村の練習量も誰もが認めるものだった。それはしっかりと実力の向上に繋がっていた。

苦労した二人が勝った瞬間は絶対に忘れないよ。本当に感謝している。ありがとう。最後の七大を一緒に戦えてよかった。そして本当にお疲れ様。

Ｄ３　大藤・大橋０（12-21 10-21）２伊庭・小宮山

相手の攻撃力に完全に力負けした感じだった。またやっぱり組み立てだったということもあってコンビネーションも不完全だった。

大橋には急遽出てもらうことになり、気持ち的にも余裕がない中、よく戦ってくれたと思う。ここでは一勝しか挙げられなかったけど、その一勝を大事にこれからの大学でのバドミントン生活に大いに活かしてほしい。

Ｓ１　小南０（17-21 9-21）２嶋田

小南には本当に苦しい場面しか経験させてやれず、主将として本当に申し訳なく思っている。なんとか一勝させてやりたかった。

ただこの成績に責任を感じ、重荷に思わないでほしい。小南の実力にみんなが納得し、出した訳だから。成績が出なかった責任はこの俺にある。

一年生ながら七大に出て、チームのために懸命にコートを駆けた。それだけで俺は嬉しかったよ。これからは七大の経験を糧に上を目指して頑張ってほしい。ありがとう。お疲れ様。

S2　横山0（8-21 20-22）2伊藤（彰）

一セット目は完敗するも、セカンドは横山の気迫が感じられた。しかし惜しくも届かなかった。

横山もなかなか勝ちきれず、苦しい思いをしたと思う。もしかしたら今でもその苦しさ、悔しさが残っていると思う。

また七大とはどういうものかを身をもって経験したと思う。副将となりこれからはチームのことも考えねばならず、ますます大変になると思う。この七大での経験を必ず糧にして活かしてほしい。自分の過去の経験をチームの未来のために活かす。それが上に立つ横山の役目だ。今後の横山の活躍に大いに期待している。

S3　大藤2（21-11 21-16）0伊庭

ようやく大藤が引きたい相手に当たった。しかも完勝。無駄なミスがあまりなく、大藤らしい要所を締めるプレーで自身最後の試合を勝ちで終わらせた。

今大会は大藤にとって自分は勝っていても、チームが負けるという場面が多く、もどかしい思いをさせてしまった。すまない。

大藤が実力的にこれからの東北大を牽引していくのは間違いない。経験も積み、主力としての自覚もきっと自分の中に芽生えているはずだ。横山と同様、これからは自分の力、経験というものをチームに活かさなくてはならないと思う。現状に満足せず、自分に厳しくストイックに上を目指して、かつチームのことを考えて頑張ってほしい。

共に戦ってくれてありがとう。これからも期待している。

S4　水谷1（21-18 15-21 21-23）2松木

誰もが固唾を飲んだ試合。必死に球を追い続ける水谷をみんな一丸となって応援し、誰もが水谷を勝たせたいと思った。しかし、運命とは非情なもので、ファイナルデュースの末、敗北を喫した。もし勝負の神様がいたならば、今回は俺たちにはとことん冷たかったようだ…。

前述したとおり、水谷の姿勢からは七大に対する強い思いが、ひしひしと感じられた。それは大会期間であれ、練習中であれ。

きっと責任を感じたのだろう、最後の試合が終わったとき、水谷が涙を浮かべながら、「ごめん、ごめん」と謝ってきた。結果は残念な形で終わってしまったが、今まで共に頑張ってきた水谷が涙を見せるほどのチームへの責任感を持って必死に戦ったということ。主将として、その事実だけで本当に嬉しかった。共に戦えて本当に良かった。ありがとう。そしてお疲れ様。

Ｓ５　武田２（21-17 21-10）０妻鹿

※Ｓ４で試合が決まったためカウントされず

優自身最後の試合をしっかりと締めて終わった。最後も優らしい、上からのショットが冴えていた。

優だけでなく、田村、野崎、水谷、ＭＣでの真、明宏、上山たちの試合を見て、素直に「あぁ、もう俺らの最後の七大が終わるんだな。」そう思った。高校野球の受け売りのようだけど、もう少し七大をこの同期のみんなで戦っていたい。終わりが近づくにつれて心からそう思うようになった。

それを最も強く感じたのは紛れもなく優のこの試合だった。それはやっぱりずっと組んでいたからという要素があるからだと思う。最後のダブルスのときは勝つことに必死であまりそんなことを考えなかったが、一歩引いた視点になったとき、その思いがふつふつと沸いてきた。

実力的にも、精神的にも優は間違いなく東北大の柱になってくれたと思う。方針で悩んだとき、一番に相談したのはいつも優だった。頼ってばかりいてすまなかったな。七大が近づくにつれてその力は安定していって、しっかりと四年としての役割を果たしてくれたと思う。感謝している。

この七大を、いや七大だけでなくこれまでの多くの試合を一緒に組んで、共に戦えて俺は本当に良かった。今まで本当にありがとう。そして本当にお疲れ様。

結果、２－５で最終戦の京大に敗退。最後の試合を勝利で飾ることは出来なった。

ＭＣ

山口２（17-21 21-19 21-10）１

水口・高荷２（21-15 19-21 21-10）１

原田・上山２（21-14 21-12）０

田村洋・浅野２（21-16 21-10）０

・水口は一戦目のシングルでは惜しくも負けてしまった

が、二戦目のダブルスで見事勝利。大学始めとは思えないスマッシュでみんなを驚かせていたね。
・田村・浅野は二連勝、ぐっちも勝利で締める事ができた。

三人とも今城と同じように、メンバーに入りながら、試合の機会を与えてやれなかった。申し訳なかった。しかし、三人とも練習を通して実力を大きく伸ばせたと思う。その経験は絶対に無駄にならないので、次に活かして欲しい。特に田村とぐっち。次は自分たちの代、最後の年。きっと主力として戦って行くはずだ。今までの努力を無駄にせず、更なる成長を期待している。
・上山と原田は一、四年ペアになってしまったが、うまく噛み合って最後を勝利で飾った。

上山も真同様、最後まで懸命に応援してくれた。力になったよ。薬学部ということで学年が上がるにつれて忙しくなり、いろいろ苦労したこともあったと思うけど、最後まで一緒にやれて本当に良かった。ありがとう。

結局のところ、名大戦の一勝のみで、そのほかは全て敗戦、一勝五敗というあまりに不甲斐ない成績で終わってしまった。順位は六位となった。先輩たちが築いてきた輝かしい伝統に泥を塗り、成績を出せなかった自分を責めた。

――――

試合を終え、多くの先輩たちが声を掛けてくれた。その度に僕は頭を下げた。

連日会場に運び、応援してくださった塩田さんは「謝ることはない。一緒に頑張ってきたお前らが必死になって頑張ってくれた。成績はいいに越したことないけどＯＢにとってはそれだけにいいんだ。」と言ってくれた。

僕らが入学したときからほんとによく相手してもらい、先輩が現役のときにも、そしてＯＢになってからも共に歩んできて下さった先輩。そんな塩田さんにこんな言葉をかけて頂き、本当に本当に嬉しかった。

今まで本当にお世話になりました。ありがとうございました。

賢さんには一年間の労いの言葉を頂いた。一代前の主将の賢さんには悩んだときにいつもアドバイスを頂いていた。最後の最後まで本当にありがとうございました。

功介さんには「一緒に頑張ってきたお前らだから応援したくなるんだ」と言ってもらえた。四年間の努力が思い出された瞬間だった。

その他にも多くの先輩方から数え切れないほどたくさんのありがたいお言葉を頂きました。お忙しい中、また遠いところ僕たちのために応援に来てくださり、本当にありがとうございました。芳しい成績は上げられず、本当に申し訳なかったのですが、選手達の心強い支えとなりました。あらためてこの場を借りてお礼申し上げます。

試合後。本来なら、おおうさピョンピョン大会、およびレセプションが盛大に催されるのだが、他大学で大会期間中に新型インフルエンザの発症が確認されたため、主管側の判断により、自粛されることになった。

洗濯などの仕事をこなしながら、一年生はレセプションの準備も着々と進めていたようで、その機会はなくなってしまった。非常に残念だった。（後日無事見ることができましたが）

一年生が、慣れない環境の中で仕事をこなしてくれたことにもこの場を借りて感謝します。本当にありがとう。

……しかし、レセプションは立ち消えになってしまったものの半ば自然発生的に全体での飲み会、いわば「非公式レセプション」が任意参加の形式で開催され、我が東北大からも多数が新宿歌舞伎町へと繰り出した。実のところ、この時点で発熱している人もちらほらいたのだがこれは後日談ということで。

まさか最後の七大で再び踊らされるとは思わなかったな、田村。体で覚えたことは何年たっても忘れないものですね。

楽しく、思い出に残る飲み会になりました。

とにもかくにもようやく僕たちの七大は終わった…。

駆け抜けた一週間だった。やっと終わったというのか、もう終わってしまったというのか…。

試合が終わってからはしばらく何も考えられなかった。それはたぶん、結果を出せなかった不甲斐なさと、一年間の肩の荷が一瞬にして降りたことからだと思う。

一年前のこの飛翔の「主将として」の中で立てた目標をどれだけ達成できたかもわからない。

また、この七大の結果から見ても後悔が残るのは当然だ。

これからのバドミントン人生の中で、この七大の結果はきっと僕の心のどこかで一種の重荷として残っていくだろうと思う。そのことに対しては覚悟ができている。

大げさかもしれないが、それが主将を務めたことの責任というものだと自分自身の中で捉えている。

しかし、主将を務めてどうだったかと聞かれれば、間違いなく僕は良かったと答える。何度も繰り返すことになるが、チームのために必死で戦うみんなの姿、声を枯らし、懸命に応援してくれた後輩たち、僕たちのために応援し、支えてくださる先輩方、そして何より、年間を通し、主将の任務を全面的にバックアップしてくれた同期の存在。

そんなみんなに囲まれて主将ができた僕は本当に幸せでした。関わってくれた全ての人たちへあらためて感謝します。本当にありがとうございました。

次は今城が主将だ。今城もどうやら就活をするようで、僕と同じく厳しい状況になると思う。また戦力的にも厳しい状況が続くが、精一杯できる限りのことをしてほしい。自分の場合は周りに頼りっぱなしだったけど、今城自身も必死でやればきっと周りも必死で協力してくれるはずだ。全力で取り組み、時には周りの力を借りて、みんなで一緒にこの一年間を走り抜けて行ってくれ。もちろん、悩んだらいつでも相談に乗るから。

最後になりましたが、厚いご支援、ご指導をしてくださった玉川先生、渡邉先生、中井先生、練習を通してのご指導、また東京まで応援に来てくださった多くの先輩方、この東北大学学友会バドミントン部の運営に関わって下さった全ての方々にあらためて感謝の意を表します。

東北大学バドミントン部主将を務め、みんなで七大を戦い抜いたことを僕は誇りに思います。本当に本当に、ありがとうございました。

長文乱筆大変失礼しました。ご容赦ください。以上で七大の戦記とさせていただきます。